

Prognostic value of chromosomal translocations in small-bowel diffuse large B-cell lymphoma

池上, 幸治

<https://hdl.handle.net/2324/1654747>

出版情報：九州大学, 2015, 博士（医学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）



氏 名：池上 幸治

論 文 名：Prognostic value of chromosomal translocations in small-bowel diffuse large B-cell lymphoma

(びまん性大細胞型 B 細胞リンパ腫における染色体転座の予後的重要性)

区 分：甲

論 文 内 容 の 要 旨

本試験の目的は小腸びまん性大細胞型 B 細胞リンパ腫 (DLBCL) 患者における特に免疫グロブリン重鎖遺伝子 (*IGH*) 座を含むリンパ腫関連染色体転座の発生率および臨床的有意性を調査することであった。原発性小腸 DLBCL 患者 35 例におけるパラフィン包埋組織に対する間期蛍光 *in situ* ハイブリダイゼーションを用いて、*IGH*、*BCL6*、*MYC* および *BCL2* を含む転座を調査し、全生存 (OS) および無増悪生存 (PFS) 率をカプラン-マイヤー法により評価した。*IGH*、*BCL6*、*MYC* および *BCL2* を含む転座が、33 例中それぞれ 23 例 (70%)、12 例 (36%)、8 例 (24%) および 6 例 (18%) で検出された。*IGH* 転座を有する患者は、有しない患者よりリンパ腫の再発または進行の頻度が低かった (17% 対 60%、 $P=0.034$)。単変量解析により、若齢、低い国際予後指標、*IGH* を含む転座、*MALT1/BCL2* の過剰コピー、および *BCL6* 免疫発現が、より良好な OS および PFS に有意に関連することが示された。コックス多変量解析により、*IGH* を含む転座は、OS では有意差が認められなかったものの良好な PFS の独立した予後因子であることが明らかになった。*IGH* を含む転座は、小腸 DLBCL 症例では多くみられる。これらの転座は、良好な臨床経過を予測する可能性がある。